

# 大学図書館問題研究会 京 都

URL : <http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/index.htm>

〒 621-8555 京都府亀岡市曾我部町南条 1-1 京都学園大学図書館 大館和郎気付  
(TEL) 0771-29-2292 (FAX) 0771-29-2299

## 京都ワンディセミナー開催される

去る7月6日京都アスニーで行われました京都ワンディセミナー「大学図書館における電子的情報の利用と提供」は30数名の参加者を得ました。まず、電子的情報を提供する側の立場から講師をしていただいた坂上光明氏(東北大学附属図書館事務部長)が国立大学図書館協議会の電子ジャーナル・タスクフォースの活動を中心に話されました。今、予算の削減と雑誌価格の上昇という状況の中で電子ジャーナルの導入をはかる大学図書館にとって最も気になる内容の話でした。次に電子的情報を利用する立場から講師をしていただいた引原隆士氏(京都大学工学研究科教授)が個人的な研究経歴であった電子的資料とのかかわりについて話されました。電気工学が専門の研究者の方ですが、電子的資料の功罪を冷静に指摘し、印刷資料も軽視すべきでないと言及されました。その後、参加者からの質問と意見の交換が行われました。

当日の参加者の感想は  
次ページをご覧ください。



目次	京都ワンディセミナー報告……………1 頁
	セミナー感想 1 (北川さん)……………2 頁
	セミナー感想 2 (大綱さん)……………3 頁
	数珠つなぎ(第 59 回)……………4 頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又は FAX で  
編集気付 (odate@kyotogakuen.ac.jp) 大館まで

## 京都ワンディセミナー 感想 1

## ワンデーセミナーと電子ジャーナル関連業務

奈良女子大学附属図書館 情報管理係 北川 昌子(きたがわ まさこ)

「えっ、Elsevier の雑誌を中止するって！○○先生が！」

ワンデーセミナーを終えた後、また一日一日と新しく学内外の情報や反応が加わった中で仕事をしている。2003 年刊行外国雑誌の更新を部局に照会中の今、電子ジャーナルコンソーシアムの母体となっている冊子体の継続の有無情報に敏感にならざるを得ない。

また、電子ジャーナルを利用者に提供する側として、各商品情報（特徴・条件）に左右され、時には出版社に翻弄されているのではないかと思える状況にさらされてもいる。

講演者坂上光明氏（東北大附図）が、電子ジャーナルコンソーシアムの世界的浸透・発達の状況の中、図書館や図書館員の役割として本来の力量や専門性が発揮できる状況になったのではないかとの意味のことを話されたのは耳痛い。

小規模の大学図書館では、現実には、大規模大学とは異なり、重複雑誌を調整するまでもなく、もうすでに初めから全く重複雑誌が存在しない状態である。その中で、電子ジャーナルへの理解協力と導入への意識を高めてもらう環境づくりを考える。これはまるで、企業での営業活動の戦略や売り込み作戦にも似ている。そのためか、学内でもどちらかといえば穏やかと思われていた図書館が、積極的によく活動しているという評価を加えられつつある。多くの展望の見込めない予算の将来性を知りながらも、大学図書館としてのアピールや研究室訪問（説明会等）を行い、個々の研究者の声や研究室事情を聞き入れようとする態度や、最近の研究者の知らない情報を提供しようとする態度が図書館のイメージを変える一因になっているのは確かだ。

他大学の状況を参考にしながらも、個別の事情に応じた方法で次の方策を他の協力を得ながら思案したり、単独の雑誌係がないため、並行して図書部門の別の企画を立案から実践へ繋げていく。少数の図書館員ですでに限界に近い量をルーチンの仕事として処理し、人件費も削減傾向の小規模大学の現実では、まさに熱意や努力しかない。

これまでも、大学図書館でありながら、館長や図書館員個人の性格・資質に左右されて図書館が廻っている傾向が、規模が小さいほど見受けられた。新機軸が必要な時ほど、その側面が強くなっている。この余裕がなくなった厳しい時代だからこそ、図書館員の広い視野や洞察力、総合力が求められているといえる。

一方、講演者引原隆史氏（京大工学研究科）が、利用する研究者の視点から、図書館と図書館員への課題として示唆された中で印象に残っていること。それは、コンパクトで冗長かつ適度に乱雑なあらゆる情報の入口をもつ図書館は、オリジナル化を確保することが必要ということ。

これは、冒頭、引原氏学部時代の故桑原道義教授の講演会での言葉、「他の人がみんな前を向いて走っていたら、自分は違う方向に走りなさい。みんながその方向に道があることに気が付いたときすでに他の人より進んでいる。」に通ずる。研究の本質と情報についてのコメントであるが、今、多数の大学図書館が歩調を合わせて行っていることは、本当に個々の大学の特性や利用者要求にあっているかどうかは、冷静な判断が必要で、確認す

る必要がある。

現在の電子ジャーナル導入期である一連の動きは、まだ緒に付いたばかりであるが、将来を見据えて検証が必要と思えた。大学の財源や、出版形態の変容との関わりが非常に大きく、出版社自身も生き残りをかけた危機感の中にあるだけに、数年先をも簡単に洞察することができにくいものであるのは確かである。

特に、4年前に創設された SPARC の活動と方策は、今後の学術コミュニケーションの変革を期待させる。雑誌価格の抑制、高レベルの著者の賛同や支持、代替出版システムをはじめとして、オープンアクセスへの指向 (BOAI(Budapest Open Access Initiative)) 等は、将来的には利用者が学術研究を自由に入手する時代をめざしてもいる。

今、国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースは、出版社系・アグリゲータ系だけではなく、学会系もコンソーシアムの視野に入れた交渉を行おうとしている。各分野の研究者の要望が高い中で、冊子体や電子ジャーナルの形態を問わない外国雑誌全体予算を、どういう比率で導入するか、図書資料費の中でどうバランスをとるか、各大学の特徴を活かした導入案を策定するための資料提供や外部資金の導入の可能性を探るなどが、身近で当面の新たな仕事になりそうである。

しかし、目を転じると、情報が組織の壁を超えてシームレスというより共有志向へと、新たな変貌が見え隠れする中で、図書館やそこに働く私たちがどのように積極的に関わっていけるかも楽しみとしたい。



## 京都ワンディセミナー 感想 2

### 京都ワンディセミナー「大学図書館における電子的情報の利用と提供」を受講して

国立情報学研究所 大綱浩一 (おおつな こういち)

図書館関連団体主催のセミナーでは、往々にして、「提供する側」だけでの一方向的な議論になりがちだが、「利用する側」と「提供する側」の両面から大学図書館における電子的情報の位置づけを模索した点において、本セミナーは有意義であった。

【利用する側：研究者・学生】 ⇒ 電子的情報 ← 【提供する側：大学図書館】

以下、セミナーを受講しての雑感である。

(1) 雑誌の選定方法

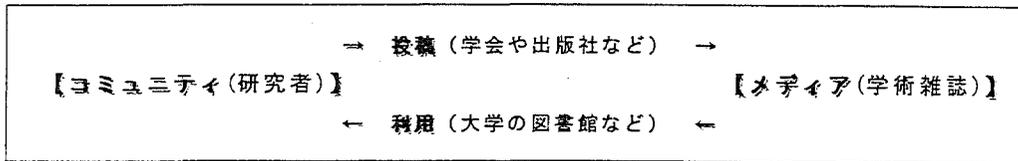
組織的に購入するとなると、雑誌を選定する必要が出てくるが、その選定方法には未だ多くの大学図書館が頭を痛めている。そんな中、一定期間、経過の見える状態で候補雑誌を投票してもらい多数決をとる試みが紹介された。この方法は囚人のジレンマに陥る可能性もあったが、結果的に理性的な選定となったとのことであった。

(2) 所蔵と保存

電子的情報は、利用に所蔵を前提としないため、コレクションは外在化する傾向にあり、その結果、図書館はコレクションに対するコントロールを失う危険性がある。それでも、図書館は社会的記憶装置としての役割を果たさなければならない。

(3) メディアの変容

学術情報流通の基本構図は、「コミュニティ」と「メディア」から成る。



メディアの変容は、必然的に学術コミュニケーションの変容や「図書館」の社会的機能の縮小をもたらす。図書館はネットワーク時代における新たな存立基盤を見いだす必要がある。

(4) 研究者の目的 図書館の目的

研究者の目的は研究であり、情報の利用は研究の手段である。

図書館の目的は情報を提供することだろうか？ 情報の提供は手段に過ぎないのではないか。ではなぜ図書館は情報を提供するのだろうか？ それは顧客の満足のためである。

(5) 誰が学術情報の流通に責務を負うのか

社会システムとしては、十分な機能が効率的に提供されるのであれば、商業的か非商業的かは問わない。自らの使命を明らかにし、その使命に沿って責務を果たし、顧客の信頼を得ることができた者が、社会システムとしての役割を担うことができるだろう。

参考文献

1. 海野敏, 戸田慎一. 「図書館」の社会的機能縮小の必然性: 情報流通の構造変化と図書館の存立意義電子図書館: デジタル情報の流通と図書館の未来 / 日本図書館情報学会研究委員会編.-- 勉誠出版, 2001.-- (シリーズ・図書館情報学のフロンティア ; No.1)



(数珠つなぎ 6 ページから)

2 日目はメールサーバを使ってログを調べたり、ネットワークをモニタする実演が行われ、自分の環境は自分で守るということで自身でできるウィルス感染予防策やセキュリティ対策が説明され、各種のフリーソフトが紹介されました。この研究集会でウィルスが発病しなかったのでスタッフは恐縮されていましたが、それがメインではないし、集まった参加者がネットワーク及びセキュリティに関して知識を深めたという点で私自身は成功だったと思っています。私自身、管理していたサーバやパソコンがウィルスに感染したこともあり、またこの研究集会ではありませんが某所でウィルス感染の実演を見たことがあります。ネットワークからは遮断されたパソコンが感染によって一瞬にして数百のフォルダの中に感染ファイルができる様子は怖い思いがしました。感染によってシステムを再構築するというような不毛な労力も経験済みです。最近のメールでは WORM\_BADTRANS.B、WORM\_KLEZ.H がダントツに多いです。ほとんど毎日送られてきますね。ウィルスのパターンファイル更新が日課です。このような研究集会を企画された大図研と運営された福岡支部のスタッフの皆さんに感謝しています。どうもご苦労様でした。

今の部署では Web ページの管理もやっていますが、その他に Web を利用した休講情報システムの管理を担当しています。このシステムは休講のデータを管理者画面から入力すると Web 画面に表示され、それと連携して自動で当該科目の受講者に電子メールで休講のお知らせが配信される仕組みです。利用者によれば、最初に 1 度だけ自分のメールアドレスを入力するという手間がありますが、今までは学内掲示版だけだったのが、家でも大学でもバイト先でも休講情報がメールで送られてくるのですからね。学生サービスなのですが、将来は休講情報だけでなく他の情報も流したいと考えています。学生のメールといえば携帯電話ですね。やはり登録アドレスは携帯電話が圧倒的に多いです。それとこれまでの経験からシラバスの全文検索というのも実現したいですね。

家庭でもセキュリティには注意し ADSL ルータを組み合わせた数台のパソコンをネットワークで接続しています。その中にはファイル共有・プリンタ共有・MO や CD-R 等の共有を目的とした PC-UNIX サーバを構築しています。こういったサーバとなるパソコンは自作パソコンです。自作といってもパーツを購入して組み立てるのですが、当然相性問題や不具合等は自分で解決します。やはりサーバですから安定な稼働を目指しています。

最近では静音/低消費電力の音楽サーバを作っています。きっかけは娘の CD ラジカセが故障した時に言った「CD やテープを交換するのが面倒」という一言なのですが、MP3 などの高圧縮フォーマットにより多数の曲をサーバのハードディスクに保存し、家庭内のどこにいても自分の好きな音楽が聞ける環境を作りたいと考えています。家庭内のどこにいてもという条件は、無線 LAN により検証済みです。昔のレコードもプレーヤーが故障するまえにハードディスクに保存しておきたいです。昔の曲と言えば近隣の公共図書館をよく利用しています。先日も以前から探していた 1970 年代のあるフォークソングを見つけたので保存させてもらいました。ハードディスクにどの位保存できるかについては、例えば 40GB のハードディスクに 128kbps でエンコードするとして、CD 約 600 枚分は保存できる計算です。音楽以外にもラジオ放送の録音、テレビ放送の録画等も検証していますが満足できるところまで行ってません。家庭でもインターネットも含めてネットワークを利用して上記の様なオンデマンドな環境を実現したいと思っています。

「お父さん、美味しいコーヒー入れて！」おっと忘れるところでした。家庭内コーヒーサーバが私の役割なのです。

